

ほんぎょう
本行 遺跡 2

鳥栖市教育委員会



丁寧に埋納されていた中広形銅矛

上の写真は、本行遺跡のほぼ中央部付近で見つかった「中広形銅矛」という種類の武器形青銅祭器です。紐などをつける部分（耳）を下にして、刃部を立てた状態で埋められていました。銅矛の周りの土も黒くなっていたので、布に包まれるか、木箱に納められていたようです。銅矛は、本来実用の武器として作られました。時代が新しくなるにつれて大型化し、まつりの道具として使用されるようになりました。この銅矛は刃を研いでおらず、柄を差し込むソケット状の部分（袋部）も鑄造時の中型（中子）が詰まったままで、耳にも孔があげられていません。本行遺跡ではこのほか、小銅鐸1点、中国の銅鏡を真似た国産の鏡（仿製鏡）2点、青銅製鋤先2点などが出土していますが、これらはいずれもまつりに使われたものとおもわれます。

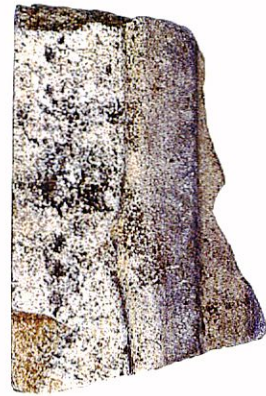
この遺跡では銅鐸・銅矛・銅剣などの青銅器鑄型片が両面を鑄型として使用した4点を含め、12点18個体分発見されたほか、銅矛の土製中型（中子）が見つかっています。日本で青銅器の生産が開始されるのは弥生時代中期初め（約2100年前）と考えられており、鳥栖市内では柚比遺跡群でこの時期から青銅器を製作していることが知られていましたが、この発見で、市南西部でも柚比遺跡群同様に比較的早い時期から青銅器を製作していたことが明らかになりました。

ここで出土した青銅器6点と青銅器の鑄型12点は平成9年5月に佐賀県重要文化財の指定を受けました。



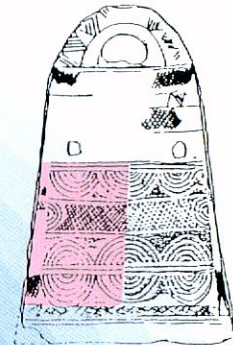
銅剣の鋳型▶

「中細形銅剣」という種類の刃部はほぼ中央部分の鋳型片で、裏面にも鋳型の痕跡があります。この鋳型からは長さ40～46cmのものが作られたとおもわれます。このほかにも7点8個体分の銅剣鋳型がみつかっています。



▲銅矛の鋳型

「中細形銅矛」という種類の裾部分にあたる鋳型片です。現状は11.2cmで、この鋳型から作られた製品は、55cmくらいとおもわれます。このほかにも5点の銅矛鋳型がみつかっています。



▼青銅製鋤先

長さ5.2cm、幅9.0cmで、弥生時代後期の住居跡からみつかりました。小型のため、実用の農工具として使われたものではなく、儀式に使われたものと考えられます。青銅製鋤先は、あと1点住居跡から出土しています。



◀銅鐸の鋳型

弥生時代後期の大溝から出土しました。長さ10.0cm、幅9.1cm、厚さ6.3cmの鋳型片で、砥石に再利用されていました。この鋳型から作られた製品は、高さ16.0cmほどで、安永田遺跡で発見されたものよりも古いタイプのものです。

小型仿製鏡▶

弥生時代後期の住居跡から出土しました。中国製のを真似て作った国産の鏡で、厚さ0.55cm、復元した大きさは直径7.8cmです。実用品ではなく、まつりの道具として使われたようです。本行遺跡からは、もう1枚みつかっています。

